巻　頭　言

研究・連携支援センター長　山　本　淳　子

京都学園大学総合研究所は2012年度よりリエゾンセンターと統合し、「研究・連携支援センター」として、本学の研究活動の支援と、産官学および他の教育機関との連携事業の支援とを、二つながら担うこととなった。その統合初年の今年度、はからずも研究・連携支援センター長を拝命し、さらに縁あって学外企業との連携研究を行うこととなった。どちらも未経験である。特に後者については、筆者の専門とする国文学の分野では、一般企業と連携研究すること自体、非常に珍しい。しかも今回の連携の相手は、農業生産法人である。平安文学と農業とのコラボレーションなど、あるいは今まで例のなかったことかもしれない。現在進行中の研究ではあるが、成果が学内外に広がりつつあることもあり、この場を借りて次第を少し記しておきたい。

出会いは、京都府南丹広域振興局が主催する「ものづくり産業就業フェア」でのことであった。亀岡市や近隣の企業が事業内容をパネル展示するこの会に、地元産業を知るために足を運び、美しい紫色のサツマイモ「京甘藷・紫」に惹きつけられた。「紫色といえば紫式部、源氏物語でしょう。京都にふさわしい、雅な紫色のスイーツを創りませんか」。その場で提案した。ちょうど京都産学公連携機構の文理融合・文系産学連携促進事業が参加研究を募っており、「京都学園大学・三煌アグリ連携グループ」として応募し、研究資金を獲得した。研究テーマは「源氏物語の訴求力分析と、源氏物語に関わる京都雅のシンボルカラー紫の京都産品の開発」である。

源氏物語はなぜ源氏物語を読んだことのない人にも人気があるのか。この機会にアンケートを実施し、作品の愛読者から未読者までを母集団に、源氏物語のイメージ調査をしたい。そのうえで、源氏物語でオーソライズした紫色のスイーツを開発し、京都スイーツの新定番色として提案する。ライバルは既存の京都スイーツの抹茶色だと、勝手に想定する。試作品第一号・紫色マカロンのできは上々で、試食と共に本学の授業「日本の文学」受講生、旅行会社の京都修学旅行担当者、京都府内の中高国語教員、食品見本市来場者等、計550余名にアンケートを実施した。11月には、ついに源氏物語研究の専門家集団である中古文学会秋季大会の懇親会にマカロンと紫芋大福を差し入れ、「おいしい」「おもしろい企画」との声を得た。

嬉しいことに、学内の経営学部の実験ショップ「京學堂」が販売に乗り出してくれることとなり、紫芋マカロンは試作品から製品第一号となった。製品化を機会に「京紫マカロン」と命名、他の試作品も「京雅シリーズ」と名付けてはどうかなど、アイディアは尽きない。

本研究では、農業、食品、流通販売など、古典とは縁遠いはずの分野とつながることになった。だが研究の核はやはり源氏物語にある。これは、古典文学を文化遺産ではなく文化資産として現代に活用する、実践研究なのである。紫式部は笑って認めてくれるに違いないと思っている。